

ARIAN ROSE PRESENTS



NOVEL ANTHOLOGY

この昔い溺愛から 逃げられ ません

「令嬢は貴公子様の
お気に入り」

Authors
玉響なつめ
まこ
櫻井みこと
星見うさぎ

Illust.
カズアキ

大人のためのご褒美ノベルアンソロジー

大人のためのご褒美ノベルアンソロジー
**この甘い溺愛からは
逃げられません！**
～令嬢は貴公子様のお気に入り～

Contents



『不思議な夢と紡ぐ恋』

玉響なつめ

003



『元使用人は麗しの貴公子に 連れ戻される』

まこ

073



『婚約を解消されたばかりですので、 溺愛はご遠慮くださいませ』

櫻井みこと

141



『大好きな幼馴染が 英雄騎士になりました』

星見うさぎ

213



Characters

＊登場人物紹介＊

不思議な夢と紡ぐ恋

玉響なつめ



町娘

サフラン

＊・・・・・・・・＊

田舎出身の平民。
幸運を付与する能力を持ち、
手先が器用で刺繍や
飾り紐を作るのが得意。



？

ラハブ

＊・・・・・・・・＊

突然サフランの前に
現れた美青年。
まるで子供のように
無邪気なところがあり、
浮世離れた雰囲気をもつ。

おかしいなって、思ってたんだよ。

お祭りで賑わう町中、行き交う楽しそうな人たち。

本・当・なら、私がそこにいるはずじゃないのって思う光景があった。

「カシム……どうして？」

「サフラン!? ええと、その……これは」

「あら、この人が例のカノジョさん？ 素朴で可愛らしい方ね。でも残念、ご覧になった通り彼はワタシと一緒にお祭りを回ることになったの。この意味、わかるでしょ？」

年に一度のお祭りだから、一緒に回ろうねと言った私に彼はなんて言ったっけ？

そうだ、『仕事忙しいからまた来年』だ。

なのにこれはどういうこと？

彼は仕事の制服なんて着ていなかった。

気合いの入ったデパート服に身を包み、傍らには私と真逆の、スタイル抜群で可愛い女の子を侍らせているではないか。

見せつけるように腕まで組んじゃって！

「サフラン、あのさ……」

「……お邪魔してごめんなさいね。それじゃ」

「あはは、ごめんねカノジョさん！ 元氣出してー！」

「おい、止めろよ……！」

言い争う声が背後から聞こえる。

もう私は振り返る気力もなくて、あの場にいたら泣いてしまいそうでただ必死にその場を後にすることしか考えられなかった。

それもある、あの場から逃げるように去って——目的もないまま、目についたテントに思わず入ってしまったのだ。

「ごめんなさいねえ、まだ準備中なのよ……ってあらサフランちゃん？ えっ、どうしたの！」

冷静に考えると、よく確認もせず飛び込むだなんてどれだけ迷惑なことかと思うけど……でもそこは幸いにも私も顔なじみの、薬局にお勤めの魔法使いであるメイおばさんの出店だった。

顔見知りの存在に、思わず涙腺が緩む。

「いったい全体どうしたんだい。ああ、ああ、泣いちゃって……誰に泣かされたの！ おばちゃんが文句言いに行つてやろうか？」

「ち、違ひんです！ いや、違ひないけど、あの……」

「ほら、こつちおいで。今あったかいお茶を淹いれてあげるから」

「あ、ありがとう、ごさい……、う、うう……」

そつと私の背中をさすってくれるその手がすごく温かくて。

その温ぬくもりに我慢していたものが決壊してしまったのか、私は勢いよく泣いてしまった。

思えば、子供の頃以来の大泣きだったかもしれない。

私はこの町の生まれじゃなくて、ここから離れたところにある田舎いなかの出身だ。

優しい両親に兄弟たちがいて、平凡ながらに穏やかな暮らし。

成長してからは実家の稼業を弟が継いで、私と兄は家を出た。

それぞれ適正に合った暮らしをしよう、困った時は助け合おうと約束して、手紙でこまめにやりとりをしている。

みんな魔法を使えるから、仕事に生かすことも考えればやはり大きい町に出るのが一番だと安易な考えで私はこの町に越してきた。

私には珍しい「幸運」を付与する能力があった。

とはいえ、貴族の方などに取り立ててもらえるほどのものではない。せいぜいが『転びそうになったけど耐えられた』とか『落とし物をする寸前で気がついた』とかそんな感じの、ツイてるね！　って笑い話になる程度のものだ。

町での暮らしは、順風満帆だった。

優しいご近所に恵まれた物件ってだけじゃなく、その大家さんが経営している雑貨屋さんで雇ってもらえた。しかもそこに私が作った小物を置いてもらえて、売ればその分がボーナスとして入るっていう好条件だったのは幸運以外の何ものでもないと思う。

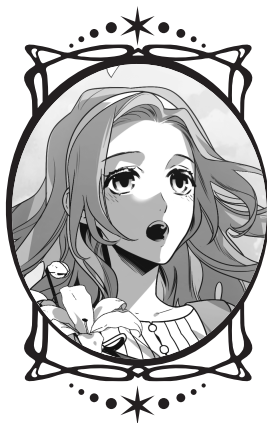
そして働き始めた頃、巡回警備中のカシムに出会ったのだ。

Characters

＊登場人物紹介＊

元使用人は麗しの貴公子に 連れ戻される

まこ



元公爵家使用人

シシリア

＊.....＊

子爵令嬢であったものの、
両親が事故で他界し、
公爵家の使用人になる。
両親の形見を買い戻した後は
使用人を辞め、
花屋で働いている。



公爵令息

フェリス

＊.....＊

ライトナー公爵家の三男で
陸軍少将。
希少な魔法使いであり、
軍ではめざましい
活躍をしている。

屋敷の玄関前に使用人たちが大勢出る。

急いで身支度を終えたシシリアもその内の一人だった。

「彼の武運を祈り、ここに祝福を授ける」

王宮からやって来た魔法使いが、目の前に跪く十六歳の少年の頭に、光の結晶を降らせている。

少年の艶やかで美しい金髪と、彫刻のように整った横顔が、その輝きを更に強めていた。

神秘的な光景に目を奪われていると、号令がかかる。

シシリアは慌てて手を揃えて頭を下げた。

「寂しくなるわ。立派に務めるのよ」

「はい、母上」

声変わりしたばかりの、凛とした声が耳に響く。

屋敷の女主人であるライトナー公爵夫人は、祝福を受けた少年——公爵家三男、フェリシス・ラ

イトナーを優しく抱き締めると、馬車まで手ずから誘導していった。

「……？」

背を屈めながら盗み見ていることに気がつかれたのか、シシリアは一瞬だけフェリシスと目が合ったような気がした。

首を振って思い直す。

一介の使用人ごときが目が合ったなんて妄想をして、恥ずかしいったらない。

今度こそ^{まふた}驗を閉じ頭を下げ、馬車に乗り込んだフェリススを見送った。

「いつてらっしゃいませ」

彼はこれから四年間、士官学校へ行く。

卒業すれば軍隊では役職のある地位、将校になることができる。

軍人として数々の功績を残してきたライトナー公爵は、後継ぎでもなく控えでもない三男のフェリススを、問答無用で士官学校へ入れた。

その道に危険は多く、士官候補生とは言え戦場に駆り出されることもあるようだった。

一昨年は隣国との戦争が過激化していたが、去年は両国とも補給期間として積極的に動かなかつたおかげでそこまで大きな戦争は起きなかった。

だから今年はどうなるのやと、友人や知り合いたちは口を揃えて心配をしていた。

国内でも稀少^{きしやう}である魔力持ちのフェリススは、魔法を剣に纏^{まと}わせ炎を操ることができる。誰でもできることではなく、彼が日頃訓練を積^{たま}わせた偉業のなせる技だった。

もしかしたら戦争になった時は最前線に立たされるかもしれない。

女性の使用人たちの中にはフェリススを慕っている人間も多く、昨日は部屋で泣いている者もいた。

最低四年は姿を見ることが適わず、命を落としてしまうかもしれないと思うと、とても気が気ではられないのだろう。

七歳から公爵邸で使用人として務めているシシリアも当然、フェリススのことを心から心配している。

こんな状況のさなか、士官学校へと向かう彼の身の安全と将来を天の神に祈った。

（どうかご無事で、健康に気をつけて、風邪をひいても一日で治りますように……でも休める時は休んでもらいたいからやっぱりほどほどな症状でそれなりに長引かせて休暇をとってもらって）
願ひ事にしては小生意気な注文である。

そうして見送りが終わりそれぞれが持ち場に戻るなか、シシリアは目当ての人物を見つけた。

「侍女長、お時間少しよろしいですか？」

「あらシシリア、そんな悲しそうな顔をして……。大丈夫、四年なんてあっという間よ」

「いえっ、お坊ちやまがいなくなるのは寂しいですが……あの、そうではなく。これを」

一枚の紙を差し出す。

「……え？」

丁寧な四つ折りされていたそれを開いた彼女は、自分の手元とこちらを交互に見た。

一年後。

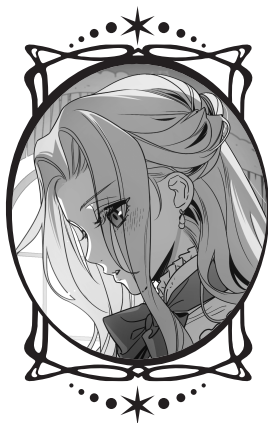
十六歳になった日に、シシリア・ニルラットはこの屋敷を去った。

Characters

＊登場人物紹介＊

婚約を解消されたばかりですので、
溺愛はご遠慮くださいませ

櫻井みこと



公爵令嬢

リュシエンヌ

＊・・・・・・・・＊

ドルティー王国の公爵令嬢。

王太子の婚約者。

次期王妃として努力し続ける

真面目な性格。



第二王子

アルノー

＊・・・・・・・・＊

ドルティー王国の第二王子。

頭脳明晰で思慮深い。

兄の婚約者である

リュシエンヌを密かに

慕っている。

「リュシーというと、息が詰まるよ」

どこからかそんな声が聞こえてきて、グラン公爵令嬢のリュシエンヌは、思わず足を止めた。
(今の声は、もしかしてエリク?)

エリクは、このドルティー王国の王太子であり、さらにリュシエンヌの婚約者である。

今夜はドルティー王国の王城で、パーティが開かれていた。

参加しているのは未婚の若い貴族ばかりだが、すでに婚約者が決まっている者が多数である。お見合いの場というよりは、同じ派閥の者たちで集まっていることが多い。

王太子の婚約者であるリュシエンヌも彼の傍から離れ、同じ派閥の令嬢たちと過ごしていた。エリクもまた、いつものように親しい友人たちと楽しい時間を過ごしているだろう。

令嬢たちとの会話も一段落した頃に、リュシエンヌはそろそろ婚約者の傍に戻らなくてはと、会場を出てエリクの姿を捜していた。

そのときに聞こえてきたのが、あの声だ。

リュシーとは、親しい人だけが呼ぶ、リュシエンヌの愛称。

つまりエリクは、自分といると息が詰まる、と愚痴を言っているのだ。

リュシエンヌは周囲に誰もいないことを確認して、バルコニーの様子を探った。

国王と同じ金色の髪。そしてすらりとした高い背は、間違いなくエリクである。

「贅沢なことを仰おっしゃいますね。リュシエンヌ様は、あれほど素晴らしいご令嬢ではないですか」

エリクと会話しているのは、おそらく宰相の息子であるキロフだろう。

キロフの言葉は、リュシエンヌを褒めたたえているように聞こえるが、実際の口調はエリクを
労^{いたわ}り、同情するようなものだった。

「ああ、たしかに素晴らしいだろうね」

エリクは特別に親しい人にだけ話す、砕けた口調でそう言った。

「あのグラン公爵家の令嬢だけあって、顔立ちも美しい。髪色は地味だけれど、所作も品があつて完璧だ」

そんな言葉が聞こえてきて、リュシエンヌはとっさに自分の髪に触れる。

グラン公爵家は歴史のある名家で、かなりの資産家でもある。

そして家族皆、美男美女ばかり。父も母も、そして兄も煌^{きら}めくほどに美しい金色の髪をしている。でもリュシエンヌだけは、淡い茶色の髪をしていた。

父方の祖母に似たらしいが、華やかな家族の中でひとりだけ地味な髪色になってしまったことを、幼い頃からずっと気にしていたのだ。

（エリクも、私のことを地味だと思っていたのね）

そんな言葉に胸が痛むのは、表向きはリュシエンヌの髪色を、優しい色だと褒めてくれていたからだ。それを真に受けて喜んでいたことが、恥ずかしい。

「あのグラン公爵家の方々と並んでいると見劣りしますが、充分にお美しいと思いますよ?」

そんなエリクの言葉に応えるキロフも、家族の中にいると見劣りするとはつきり口にしていた。「だが私との会話は、いつも政治や国際情勢ばかり。いくら見た目は美しくとも、中身はキロフの父親と同じようなものだ。そんな女性と一緒にいて、心が休まると思うか？」

「ああ、たしかに。中身が父のような女性は、どんなに美しくても遠慮したいところですね」
そう言って、ふたりは笑い合っている。

「まったく、真面目で面白みのない会話ばかりで、疲れるよ。周りの令嬢たちも、辟易へきえきしているのではないか？」

「リュシエンヌ様は、次期王妃陛下ですから。周囲も割り切って、うまく盛り立てていらっしやるのでは？」

「……っ」

これ以上聞いていられなくて、リュシエンヌは身を翻した。

今までリュシエンヌは、王太子の婚約者として、次期王妃としてふさわしくあろうと、努力し続けていた。

勉強はもちろん、この国の歴史や法律。さらに周辺国の言語や経済も学んだ。

髪色だけは変えようがない。それでも外見にも気を遣い、流行のファッションも把握してきた。

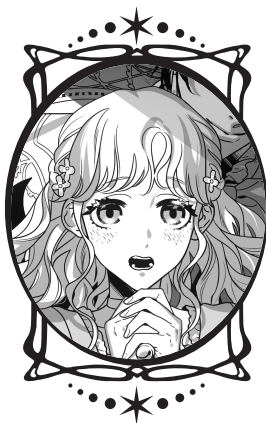
ダンスは今でも少し苦手だったが、それでも練習を続けて、人並み以上には踊れるようになっていた。

Characters

＊登場人物紹介＊

大好きな幼馴染が 英雄騎士になりました

星見うさぎ



伯爵令嬢

ミラ

＊.....＊

人の感情が色で見える
特殊な目を持つ。

幼い頃はそのせいで
人間不信になっていたが、
ローレンスに救われ、
結婚の約束をするのだが
.....。



子爵家三男／王女の護衛騎士

ローレンス

＊.....＊

子爵家の三男だが、
魔物討伐で英雄と言われる
ほどの大きな功績をあげ、
王女の護衛騎士となる。

「ねえローレンス。大きくなったら、私のことをお嫁さんにしてくれる？」

「もちろんだよミラ。じゃあ僕は将来大好きなミラを守るようにすごい騎士になる！ だから、待ってて」

私の手を握ってほっぺにキスをしたローレンスは、お守りだよと言って可愛い鈴をくれた。

嬉しくて嬉しくて、その鈴は私の宝物になった。いつも持ち歩いて、辛いことや嫌なことがあるとそれを握って自分を励ました。

ローレンスが騎士になるために遠方の騎士学校に通い始めて会えなくなっても、「いつか迎えに来るから」という言葉をただ信じていた。

……そう。そんな幼い頃の約束を、ずっと信じてきた。いつか、いつか、ローレンスは私を迎えに来てくれるのだと、本気でそう思っていた。

思わず鈴を握りしめる。そのチリンという音とともに魔法が解けた気がした。

全ては私の勘違いだったのだ。

そりゃ、そうだよね。もう何年も会っていない幼馴染との、小さな頃のただの口約束。そんなもの、本気にする方がおかしかったのだ。

ダイアナ王女殿下の就任した護衛騎士を披露するパレードで。多くの民に見守られる中、離れた場所にいるローレンスは甘く優しい微笑みを浮かべ、王女殿下と見つめ合っている。



私、ミラ・セスター伯爵令嬢は生まれつき特殊な目を持っていた。

人の感情が、色付きのモヤのようなものとして見えるのだ。

たとえば、嬉しい時や親愛・友愛の気持ちを抱いている時は黄色。

怒りや相手を害したいという気持ちを抱いている時は赤。

悲しみや辛い思いを抱いている時は青、など。

他にも、嫌悪感や灰色だったり、気持ちが混ざるといろんな色が混じって見えたりもする。

それが理解できるようになるまで、色々なことがあった。

まだ幼かったある日、私はお母様の顔の横に向かって手を伸ばしながら言った。

「お母様、皆の周りにあるこの色のついたふわふわはなあに？」

その時、お母様の顔色が変わるとともに、黄色だった周りの色も灰色に変わった。

当時はそれがどういう意味を表しているのかよく分からなかったけれど、なんとなく良くないことが起きたのだということは感じ取り、心臓がドクンと嫌な音を立てたのを覚えている。

今思えば、お母様は私がどこか普通じゃないのではないかと気づいていたんだと思う。私は人の

顔の周りにふわふわと漂う色のついたモヤのようなものが気になって仕方なかったから、顔を合わせていても度々視線は合わなかったはずだし、それまでも時々手を伸ばしたこともあったと思うから。

だから、お母様が私を「気持ち悪い」と感じるようになったとしても。それは仕方ないことだったと思う。

色のついたモヤのことを口に出すと良くないことが起きる。幼い私はぎっくりとそう解釈して、それからモヤのことを口に出すことはなかった。

とはいえ表情や声色、態度の変化と色の変化の関係性や前後の出来事や会話など、経験を重ねるにつれて、いつしか自然と理解した。

——私には、人の感情が色として見えている。

あの日、お母様の私に対する感情が好意的なものから嫌悪を含むものに変わったこともまた、分かってしまった。

あの時の出来事をきっかけに、どこかお母様は私によそよそしくなった。それは翌年に弟が生まれると顕著になり、両親は弟ばかりを可愛がるようになった。

ううん、少し違う。お母様もお父様も、私のことも可愛がってくれようとしていた。私に能力がなければ、「ちよつと弟^{びいき}最^{さい}后^ごだけど、弟は跡取りだしこれくらいは仕方ないのかな」と多少モヤモヤするくらいで、受け入れられた程度の扱い。